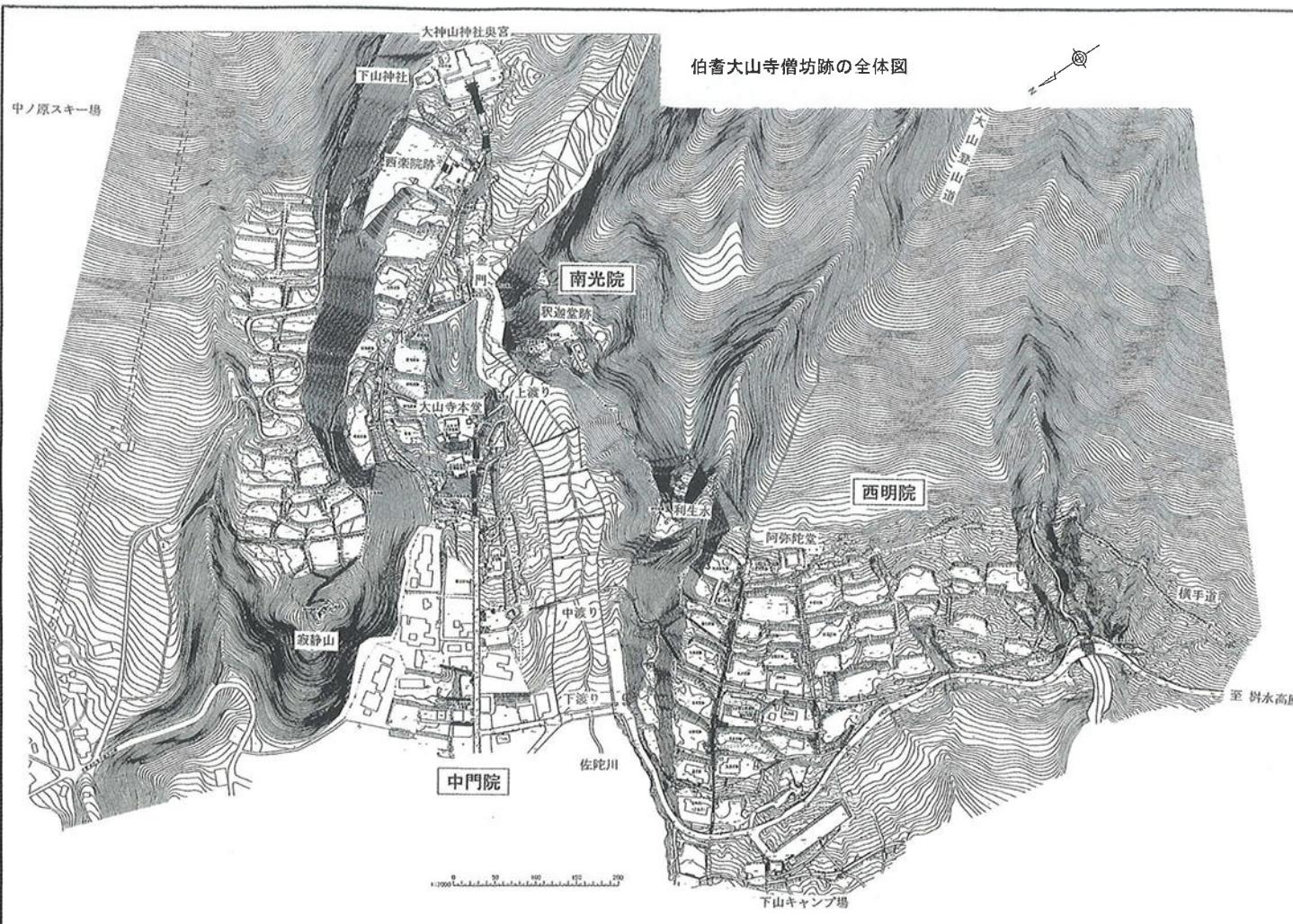


「国史跡指定」を



坊群はその絵図に描かれていないことから、そこには完全に廃絶していたと推測され、他の3群より時期が古いことが予測されます。

では、いってみたいことがあります。たものなのか？これらの僧坊群は、伯耆大山寺が最も隆盛を極めた中世のころのものではないのか？と、興味は尽きません。

教育委員会では、来年度以降この区域で試掘調査を実施して考古学の方面からも、この地域の実態解明を行う予定です。

奈良、平安時代には「大山」や「大山寺」はない？

もう一つユニークな成果をご紹
介します。きっとこの見出し
を読まれた方は、冒頭で「開山
は奈良時代」とあるのにと、混
乱されるでしょう。おそらく山
や寺はあつたでしょう・・・。
しかし、当時は「大山」とは言
われていなかつたようです。

大山が最初に歴史書に現れるのは、奈良時代の書物「出雲国風土記」に大神岳あるいは火神岳として現れます。次に円仁の『入唐求法巡礼行記』に唐から無事帰朝したことを感謝

着する場合が多かったわけです。から、地理的には筑前国の大山寺を指したものと考えられます。また、古文書には伯耆大山寺について、「伯耆西明院」や「伯耆中門院」として必ずその院の名称を記載しており、大山寺と書かれたものは平安時代以前にはないようです。では「大山」と言われるようになつたのは、いつのころからなのか?また、なぜそう言わせだしたのか?今のことろ謎であり、そこに歴史の真実がありそうです。

この大山寺とは、最近の学説では筑前国（福岡県の北部・西部）の大山寺である可能性が高いようです。しかし確実に伯耆大山として著されているのは11世紀中ごろに成立した『新猿樂記』に「伯耆大山は山伏修行者の修驗の場」と著されており、これが確実な「大山」の記述であり、中世の事になつてくるようです。もちろん、円仁の参つた大山も伯耆の大山であつた可能性もあるのですが、唐から帰るとき、当時は北九州地方に到

して大山寺にて金剛般若五千
卷を転読したことが著されてい
ます。